龍聲

東龍寺報

平成元年三月廿五日創刊

発行編集所 〒959-1502
新潟県南蒲原郡田上町
曹洞宗　東龍寺

電話 (0256)57-3395
FAX (0256)57-2174
E-mail:ryusei@ginzado.ne.jp

ホームページ
http://www.ginzado.ne.jp/~ryusei/

大本山總持寺開山瑩山禅師の七〇〇回大遠忌をお迎えして

東龍寺住職　渡邊宣昭

今年は、大本山永平寺を開かれた道元禅師と共に曹洞宗の両祖と仰がれ大本山總持寺を開かれた瑩山紹瑾禅師（一二六四年～一三二五年）の七〇〇回大遠忌（五〇年に一度の報恩法要の年）に当ります。道元禅師の教えを分かり易く伝え、多くのお弟子をお育てになられた方です。

瑩山禅師はお亡くなりになる時、御自身の境涯と後進への思いを込めた遺偈（漢詩の御遺言）を残されました。

自ら耕し自ら作る閑田地
幾度か売り来り買い去って新たなり
限り無き霊苗、種は熟脱す
法堂上に鍬を挿む人を見る

その意味は「農家の方が田畑を耕すように、私も懸命に教えを広めたり伝えたりしてきた。いつしか種が実るように弟子たちが育って、お寺の本堂で一生懸命に教えの鍬を振るっているのが見える」となり、住職のつとめを農家の日々のつとめに譬えてお示しくださいました。そして、道元禅師がもたらした正法が日本各地に広まることを願っておられたのです。

二月十八日の午後、今年初めて東龍寺を山懐に抱く護摩堂山（標高二七四m）山頂までへ愛犬・ユズと散歩の延長で登りました。例年ですと、雪に覆われている登山道には全く雪が無く、その日は四月並みの二十度近くまで気温が上がり、気持ちのいい晴天で、思わず足を延ばしました。空気も澄んでいて、角田山の稜線に日本海が入り込み、その先に佐渡の山並みが見える最高の景色でした。そして、眼下の新潟平野には信濃川が南から北へ（写真では左から右へ）横切って流れている肥沃な大地が広がっています。春になると、水を張った田んぼが鏡のように輝き、早苗が植えられると徐々に緑が濃くなり、秋には黄金色の稲穂の波となります。私は、季節ごとに変わっていく豊かな平野の光景を見ると生きる力が湧いてきます。

今年の干支は、甲辰です。

甲は十干の第一番目に出てくるもので、甲冑の「甲」の文字から鎧や兜を連想させ、種子が厚い皮に守られて芽を出さない状態や、物事に対して耐え忍ぶ状態を表す文字です。また、生命や物事の始まり、成長も意味します。

辰は「振るう」という文字に由来しており、自然万物が振動し、草木が成長して活力が旺盛になる状態を表します。ただ、あめかんむりを付けると地震の震ともなります。しかし、曲をつけると農業の農になり、田畑を耕作することを表します。

新たな年度を迎えるに当たり、瑩山禅師の遺偈の願いの如く、様々な困難を乗り越えて、それぞれのお立場で自らの田畑を耕し、大きな実りへと導いていっていただくことを念じております。

合掌

護摩堂山山頂から、新潟平野・角田山・日本海・佐渡を望む　2月18日

ご縁に導かれて

山口県　妙光寺住職　山縣洋典

東龍寺ご老師を通じて、ご当山檀信徒の方々とご縁を賜り、十数年が過ぎました。ご老師とは、その間大本山永平寺においても同時期に布教部の役寮を拝し、日々の研鑽を共に努めさせていただくご縁も賜りました。先ずは、こうした有りがたいご縁に対し、心からお礼を申し上げる次第です。

さて皆様は、「人間」という言葉が、実は仏教用語から、一般社会に流布した言葉の一つだという事をご存知でしょうか。仏教用語では、「にんげん」を「じんかん」と読みます。これは仏教が発生した古代インドにおいて、自分と他者の距離感を示す「マヌーシャ」という状態を漢字に当てた言葉です。

私たちは誰もが、無垢の状態でこの世に生を賜ります。その時点ではもちろん、その後自我が芽生え、俗にいう物心が付いてからも暫くは、自分以外の気持ちを慮ることはありません。その後の経験や環境、学習を通じ徐々に自分が一人きりでは生きていけない事を自覚します。そして自他の共存を図るべく、ある程度我執を抑え、集団生活に円滑に帰属する術を身に着けていくのです。

言い換えれば、他人の心情を鑑みるということは、対象者の気持ちを想像してお互いの気持ちや要求の着地点を見つける事とも言えるでしょう。しかし当然そのためには、相手の立場や心情を出来るだけ正確、且つ詳細に把握する必要があります。

具体的には、対象者の心情を深く汲み取るために、自分から胸襟を開きお互いが信頼しあえる環境作りが何よりです。自他の存在を本に例えると、記載されている内容を読み合い、更に書き足していけるような人間関係の構築こそが、仏教教義の根本をなすと尊い仏縁と言えるのではないでしょうか。

私たちは、前記したように自我が目覚めた時から誰もが、人生においてその人しかないご縁を賜り、出会い別れを繰り返す事を経験と、学習から学び実感するようになります。しかし思い出すとその全てのご縁は、大なり小なり自分の生きていく過程においてどのような影響があったのか、それは経験直後よりも後になって理解する事が多いようです。

遊行会研修会でのご講演の様子　8月30日（写真提供：遊行会）

しかも、一時的には良いご縁と思っても、後には良くなかったと思い直す事もあり、その逆も多々ありて。よくよく考えるとこうした事が起こる原因は、その時の自分の状況や環境また心情で、良い良くないと振り分けている事に気付かされました。結局こうした実情を踏まえ私自身の経験から感じる事は、自分にご縁あった事は全て、人生の糧となると信じて、その都度正面から向かい合うしかないという事です。例えそれが一生かかっても良くないと思えるご縁も、その経験があるから成長した今の自分があると感謝出来るようになる事こそ仏道修行の根幹だと思う次第です。

このように考えると、自分も他の方々にとって、良きご縁と考えていただけるような存在となれるよう努力精進をしなくてはならないと、強く思う今日この頃です。檀信徒の皆様、これからも有りがたきご縁、宜しくお願い致します。

住職より一言

山縣老師とは、御縁を結んでから二十年近くになります。昨年は、私が会長をつとめてさせて頂いている布教を志す全国組織の「遊行会」の研修会で、人権学習の講師をおつとめ頂くなど、人権啓発の活動に永平寺役寮時代も含めて長年熱心に取り組んでおられます。特に、今年の眼蔵会では、食事を作る典座（てんぞ）職の責任者をお願いし、五年ぶりの飯台復活を託しております。遠路お出で頂き、大役をご依頼致しますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

東龍寺眼蔵会に参加して

山梨県　東前寺住職　堀内正学

令和五年六月二十九・三十日の二日間にわたり開催された「第二十回　東龍寺眼蔵会（げんぞうえ）」に参加させていただきました。

第20回眼蔵会集合写真　6月30日夕方

私が初めてこの東龍寺眼蔵会に参加したのは東龍寺御住職の渡邊宣昭老師が永平寺で布教部長というお役を務められていた平成二十六年、同じく永平寺で役寮（修行僧の補佐、指導役）を務めさせていただいていた私が、研修として修行僧を引率して参加した時のことでした。それまで私が参加したいくつかの眼蔵会は全て僧侶を対象に行われていたものでしたが、東龍寺眼蔵会では僧侶と寺族、檀信徒の方々が心を一つに道元禅師の教えを学び実践しており、その様子を目の当たりにして感銘を受けました。また、角田泰隆老師のご講義もわかりやすく、しかしながら決して世間におもねらない内容でとても印象深いものでした。加えて渡邊老師や故二瓶法道老師、山縣洋典老師をはじめとする永平寺での顔なじみの方々と地元青年会の皆様の対応が温かく、次回もまた参加したいと思い、永平寺から山梨に戻った翌年以降も参加させていただいております。

道元禅師の主著である『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』は膨大な書物なので、毎年、巻ごとに読み進めており、本年は前年に続き「行持（ぎょうじ）」の巻の下を拝読いたしました。「行持」の巻は仏道修行の偉大な先達の足跡を辿る内容です。角田老師は道元禅師のお示しとその根底にあるご覚悟や熱い思いをご自身の実感と共にお説きになられましたが、私は特に玄沙師備（げんしゃしび）という方の「達磨東土に来らず、二祖西天に往かず」という言葉に対する「どこへも行く必要はない。あなたがいるところに仏法はある」という解釈に深く頷かされました。

まだ東龍寺眼蔵会に参加して間もないころ、縁あって日程の最後の「釈尊降誕会（しゃくそんごうたんえ：お釈迦様のご誕生を祝う法要）」にて、法要の趣旨を申し述べる維那（いの）という重要な役を務めさせていただきました。その日、帰りがけの玄関先で見送りに出てこられた東龍寺の大奥様が「立派でしたよ」と私に声を掛けてくださりました。素直に嬉しく思う気持ちと共に、人を育てようとするその気概に触れ、これからも長くこの行持に参加させていただこうと思ったのを昨日のことの様に覚えています。

これからも東龍寺眼蔵会が末永く続いていくことを心よりお祈り申し上げます。

降誕会出班灌沐中の筆者、左端　6月30日

住職より一言

堀内老師は、私が、平成二十四年十一月に永平寺に布教部長として、上山した折、私が所属する参禅係を監督する役寮をつとめておられ、その引継ぎから大変お世話になりました。行学一如（学ぶ姿勢と行いが一致している事）という言葉がピッタリの第一印象でした。お寺に帰られてからも、さらなる御精進をされ、併せて、布教師養成所でも学ばれ、檀信徒教化にも邁進しておられます。

一層のご活躍をお祈り致しますと共に、今年の眼蔵会参加をお待ちしております。

十七回忌法要を終えて

新潟市西蒲区
里村　碧

昨年七月、猛暑の中、亡父湯田一志の十七回忌法要を営みました。本堂や墓前で東龍寺様からあげていただいているお経を聞きながら、在りし日の父の姿や亡くなる前後のことなどを思い出していました。

祖父亡き後、三十代半ばで湯田家の当主となった父は、自ら週刊新聞社を設立し、家族の生活を支えてきました。自転車の荷台に弁当箱をくくりつけ、西蒲原中を走り回って取材し、記事を書き、印刷所に原稿を渡し、刷り上がった新聞を発送する、そのような繰り返しを五十余年にわたって続けてきました。

時代が進むにつれ、交通手段はバイク、自動車へと変わりましたが、その強靭な精神力と体力には、今更ながら頭の下がる思いがします。体質的にアルコールは受け付けませんでしたが、老若男女を問わず様々な人々と交わるのは大好きで、終始出歩いていました。東龍寺様とお話をするのも楽しみだったらしく、月参りの日を心待ちにしていることもありました。

家の外では社交的な父でしたが、家庭内では、一家団欒とはほど遠い存在でした。厳格だった祖父の影響を大きく受けていたのでしょう。父と親密に話し合った記憶は余りありません。そんな父でしたが「鶏口となるも牛後となるなかれ」という諺の話を私にしてくれたことがありました。祖父から言われていたことを伝えておくということのようでしたが、今思い返してみると、あれは私へというよりは、自分自身に言い聞かせていたのではないかと思います。

亡くなる年の春、米寿の祝いを親族で行いました。とても喜んで、その後もしばらく元気で居たのですが、中越沖地震の日に突然食欲不振を訴え、以後体調が急激に悪化しました。闘病中、意識朦朧とした中でも、何かの取材中のようなうわごとを繰り返していました。しかし、しだいに回数も減り声も細くなり、ついには口元に耳を寄せないと聞き取れないような声で「いのちがおわった」と言い残し、数日後に息を引き取りました。

亡くなって十六年も経つと、普段の生活の中で思い出すこともほとんど無くなっていましたが、年忌法要を機会に親族で集まって昔の姿を偲ぶことができ、何よりの父への供養になったと思います。お世話になりました東龍寺様、たいへんありがとうございました。

湯田佐市家法事後の墓参りで
7月29日

住職より一言

里村さんのお父様とは、私が住職になった昭和五十九年からのおつきあいでした。月参りに上がらせて頂き、お連れ合い（平成二十七年に亡くなられた）がニコニコしながら脇におられ、博学の様々なお話をお聞きしたことが、懐かしく想い出されます。ご寄稿中の「いのちがおわった」と言った数日後に亡くなられたとは：。ご自身の生き方を体現されたような潔い最後と敬服いたします。その後、湯田家を継承された里村夫妻も、月参りを続けて下さり、同じように様々なお話しするのが楽しみです。ご両親が一緒におられるような気持ちになります。これからもよろしくお願い致します。

法事の夏

東京都　音楽家
角松敏生

昨年、母が突然「新潟に墓参りに行きたい」と言い出した。コロナ禍の影響などもあり久しく途絶えていた墓参ではあったのだが母曰く、高齢に伴い遠出が困難になってきた、ということが一番の理由でもあった。そしてまたできるだけ多くの親戚縁者が集まる機会をもう一度経験したいという想いもあったようだ。

母は昭和九年生まれ、新潟県加茂市出身だ。父母、祖父母含め多くの縁者はすでに鬼籍に入り、現在新潟には母の弟夫婦とその子供、そのまた子供たちが暮らしている。私にとっては、叔父、叔母、従弟、従妹、従甥、従姪（いとこの子）たちだ。お互い仕事や各々の都合、距離的なこともありなかなか会うことは叶わないのだけれども、新潟の親戚とは何故か深い縁というか繋がりを感じており、再会すればいつも昨日の友達のごとく和気靄々たる団欒を過ごせるから不思議である。まさにご先祖様のお導きであろうか。親戚縁者でうまく

都合を合わせ昨年夏、その法事は実現した。東京からは私の家族三人、兄夫婦と甥たちが参加した。気がつけば総勢二十人の大所帯による法事となった。

私が母方の先祖の菩提寺である東龍寺さんに初めて参拝したのは三十年以上前になる。古刹としての由緒を感じ、その静謐な佇まいには感銘を受けたものだった。それから何度か法事の度に訪れていたが久しぶりに訪れたその地は時間の流れが止まったかのように優しく私たちを受け入れてくださった。ご住職渡辺様もご健在で嬉しかった。法話も仏事も相変わらず有り難いものだった。何より彼が「こんな大人数の法事は昨今滅多にない」とおっしゃっていたのが心に残る。特に大事を意識したわけでもなくうちの母がふと思いついたことで縁者たちが集まってくれた気運とご縁があっただけなのだけれども。暑い盛りの八月の午後であったが、これこそが法事というものなのかも知れないと思った。

読経とりんの音の合間に響く蝉時雨の静謐さに遠ざかりゆく昭和の風景を心静かに幻視していた。とその時、二匹のアブが堂内に入り込んできた。中学二年になる我が娘と、従弟の娘がキャーキャーと騒ぎ出した。然もありなんという光景ではあるのだが、苦笑いをしながら読経を続けるご住職には大変申し訳なかった。

しかし、我が娘と、従弟の娘は十年以上も会っていなかったこともあり、最初は二人ともどこかぎこちなく無口にしていたのだが、そのアブのおかげで打ち解けたようでその後の直会で楽しそうに会話していたのが印象的だった。スマホの普及によるSNSの世界で溢れる情報や主張、意見などの反作用として薄れゆく人々の繋がりを、昔ながらの法事の場に迷い込んでくれたアブが繋いでくれた。そんなふうに感じた出来事だった。昭和的にいうならば、あのアブは「ご先祖様であったに違いない」そう思える出来事だった。この法事はやってよかった、素直にそう思った。言い出しっぺの母には感謝である。

さて本年は年明けから震災などの痛ましい現実を突きつけられた本邦であります。新潟も被害に遭いました。ご被災の皆様に心よりお見舞い申し上げます。災害発生と同時に新潟の縁者の顔が浮かびすぐに安否確認をして無事を確認できたのも、昨年の法事からの思いがあったからかも知れない。明日は何があるか誰にもわからないけれども、日々一期一会を精一杯生きることは誰しも同じであることを改めて胸に刻み本年も頑張りたいと思う。

ちなみに、法事を言い出した母は昨年、自分の意志判断で独居していた家を出て老人ホームに入居した。今年齢九十を迎える。その来し方と明日を、母は今どのような想いで見つめているのだろうか。

住職より一言

角松さんは、シンガーソングライター、ミュージシャン、音楽プロデューサーです。私も新婚の頃、二人でコンサートに行ったことが懐かしいです。

御母堂様の実家が、加茂市にあり、東龍寺の檀家で、この度御婆様と音楽好きだった叔父様の三三回忌を営んで下さいました。暑い日でしたが、ご先祖へのお参りを通して、ご親族がとても仲睦まじく過ごされた様子が、コロナ禍で失われていた親族の絆が戻ってきたようで、非常に嬉しかったです。御母堂様を大切にされ、益々の御活躍をお祈りしています。

寺よりお知らせ

一月九日(火)、寺での上法事(上斎)を令和六年正月から、冷暖房完備の照光殿一階仏間で行うことにしました。

正面にお釈迦様、左右に十六羅漢像、左右の襖に十六羅漢が描かれているので、仏様に囲まれてお参りができて有難いと好評です。

最初に、本堂で、本尊・不動明王様へのお参りを必ず行って頂きます。

ただ、角松さんのご寄稿にでてきたような「アブがつなぐ出来事」は、難しくなるかもしれませんね。

照光殿にて、初めての上斎　1月9日

眼蔵会(げんぞうえ)案内

第二十一回眼蔵会を七月四日(木)～六日(土)に行います。是非、ご参加ご修行ください。

『素敵なこの世の歩き方』
～秋の田上町仏教講演会に初めて参加して～

山田　木津文代

少し時間に余裕が持てるようになり、拝聴させて頂くことに。講師の阿部正機ご老師、そのお名前に聞き覚えが。元UXテレビ「ナマトク」のコメンテーターをやって居られたとの由。あっそうか、亡き母がメモを取りながら熱心に聞いていた事を思い出しました。自称、秋葉区の「えなりかずき」とおっしゃられるように、終始、笑顔で、難しいことを面白く、分かり易くお話し下さいました。

三途の川が五六〇キロ（東京～大阪に匹敵）もあるんだという事に驚き、泳げない私は、地獄に辿り着く前に溺れて死んで？、しまうではないか等、おかしな事を考えながら引き込まれていきました。

幼い頃、私は母に、またその母（母方の祖母）からよく聞かされた言葉が三つありました。

①「タルヲシル」タル？樽？

②「上ばかり見て歩くな、下を見て」よく転ぶ子どもだったので気をつけてか？

③「天知る地知る我知る」？。本当の意味を理解するのは大分後になっての事になりますが。（今も怪しい）

日々の生活の中で、つい、時間が無いから、暑い、寒いからと、何かと理由を付けて、物事の先送り、楽な方へ、そしてうまく運ばないと他者のせいにしてしまう。

①分相応に満足出来れば、譬え貧しくも心豊かに。

②欲望には限（きり）が無い。

③ごまかしは、誰よりも己自信をごまかせない。

祖母は晩年、看護病院で暮らしていました。私は卒業後、仕事を始めたばかりで、なかなか会いに行けませんでしたが、見舞うと「忙しいのに」と労いの言葉。作っているミニキューピー人形の編みぐるみを「好いの上げるよ」。それは毎回少しずつデザインが異なり、創意工夫の作。仕上がるとお世話になっている方々、看護師さん達に差し上げている様でした。身体の辛さ、限られた不自由な生活環境の中でも、愚痴も言わず、細やかな楽しみを見つけ、感謝しながらの暮らしぶり。

今回法話を聞きながら、これは、お釈迦様の教え、道元禅師様の訓え、良寛和尚の言葉に通じるものがあるのでは、と感じました。

自分を省みて、少しは日常の中で出来ていただろうか。「素敵なこの世の歩き方」が出来るよう一日一日を丁寧に、一歩一歩進んで行けたらと、希望を抱いた秋の一夜でした。

今回、この様な有意義な講話を拝聴する機会に恵まれた事、また与えて下さった沢山の方々とのご縁に感謝申し上げます。

秋の講演会　阿部正機老師　10月7日

住職より一言

平成九年に亡くなられたお父様・木津両衛氏には、郷土史家として、龍聲に東龍寺史を丁寧な綿密な内容で、ご寄稿頂いたことを懐かしく想い出されます。

文代さんは、長年、書道教室をされ、住職の娘たちもご指導頂きました。

此度は、令和元年以来の講演会に御参加下さり、ご自身の生き方と照らし合わせながら、素敵な感想を御寄稿下さり、感謝申し上げます。

また、この度、ご講演頂いた阿部正機老師は、新潟市の東部から下越地方全域に渡る三四三ケ寺を纏める宗務所の所長をおつとめで、特に布教教化に熱心に取り組んでおられます。

予告　令和6年4月1日より

新潟県第四宗務所
テレホン（WEB）法話
『和尚さんの言の葉』始まります！

テレホン法話　電話番号
0250-47-3132

第四宗務所ホームページ内でも法話を聴くことができます
こちらのQRコードをスマートフォンのバーコード機能を使って読み取ってください。
(4/1より)

【東龍寺年中行持】

六月　金毘羅大祭
八月一日　うらぼん会（盆参）
八月二四日　水子地蔵尊並びに・観音様大祭
九月二二日　秋のお彼岸会（お彼岸の中日）
十月十日　常斎米法要
十二月三十一日　除夜祭（除夜の鐘）大般若祈祷会
一月一日　寺年始（近隣の檀家）
一月二日　寺年始（遠方の檀家）
三月二十日　春のお彼岸会（お彼岸の中日）

【令和五年度事業、行持報告】

一、月に一度、照光殿二階・開山堂・位牌堂の害獣防除を行っている。

一、五月二五日(木)「道の駅たがみ」に設置するバンブーブランコに使用する竹を東龍寺竹林で伐採した。

竹伐採　5月25日

バンブーブランコ
6月17日

一、六月七日～二十日、水道工事をして、照光殿と共に、庫裏も上水道のみの配管にした。

本堂・位牌堂・水子地蔵尊・手水舎龍口は、山の水のみを入れる。

内玄関脇の上水道
工事　6月20日

裏庭の露地、山の水
を止める

一、六月二九日（木）～三十日（金）に、駒沢大学教授角田泰隆老師を講師にお招きし、第二十回眼蔵会を講本「行持の巻（六回目）」で、行った。

今年も昨年同様に寺での宿泊と飯台は行わずに、二日間の通い、食事も弁当にした。

一、七月三日（月）午前十一時より、第三十四回金毘羅大祭を天樹寺様・光明寺様に随喜頂いて、行った。御斎無し。

一、七月二一日（金）～二二日（土）、墓地の東屋屋根塗装修理を行った。

墓地東屋屋根改修工事
7月22日

一、八月二四日（木）、第四五回水子地蔵・第二四回聖観世音菩薩大祭を行った。四年ぶりに説教を復活し、湯川・安龍寺住職齋藤隆光老師におつとめ頂いた。引き続き、地蔵作家・藤田郁美さんにお話しを頂いた。御斎、無。

齋藤隆光老師の説教　8月24日

地蔵作家・藤田郁美さんのお話
8月24日

一、十月二日（月）～十一月八日（水）墓地の杉を中心に伐採した。

土蔵脇の竹藪を工事の
為、整地　10月23日

伐採前　10月12日

夕方、伐採終了
11月2日

お墓を傷めないように
10月18日

一、十月七日（土）午後七時より、田上町仏教会では、東龍寺を会場に、講師に新津市観音寺住職阿部正機老師をお招きし、第二十六回秋の講演会を行った。

一、十月二八日（土）第十二回湯田上温泉祭り「クラシックコンサート」が本堂で行われた。

田上在住のソプラノ歌手の桑原純子氏、ヴァイオリンの高橋百合氏、フルートの尾崎博也氏のトリオで癒しの時間を過ごした。

一、十二月十四日（木）、大杉の木道を石道にした。

一、十二月二二日（金）、積雪50㎝近く、参道の桜の木が折れる。

その後は、三月までほとんど降らず。

第12回温泉まつりコンサート　10月28日

一、一月二七日（土）、「道の駅たがみ」主催の豆まきと本成寺鬼踊りを行う前に、東龍寺で町内曹洞宗寺院五名で、福豆の御祈祷法要を厳修した。

今冬最大積雪、桜の枝が折れる 12月22日

4月のような暖かさの中、梅が開花
2月20日

大杉の木道を石道に
12月14日

福豆の御祈祷　1月27日

一、二月九日(金)～三月十日(日)、「たがみひな巡り」に東龍寺も加わり、本堂左奥にお雛様三組を飾った。

ひな飾り　2月23日

【寄付御礼】

一、十二月二四日（日）、田巻源作家より、立派な盆栽の松を頂き、正月に茶の間に飾った。

尚、今年から、年始受けを以前三条市渡邉喜彦氏より、ご寄付頂いた椅子テーブルで行うことにした。

一、三月六日（水）、三条市渡邉喜彦氏より、茶の間・方丈の間の障子戸・板戸の修理をして頂き、開け閉めがとてもスムーズになった。

田巻源作家より、ご寄付頂いた正月飾りの松　1月1日

建具修理　3月6日

【参禅・参拝の報告】

一、三月十六日（木）、「日報メディアシップで坐禅に親しむ」の会員七名、坐禅二炷、お斎無し。

一、四月十七日（月）、小学校同窓の五十嵐（旧姓／古田）鳴海さん一行五名、参拝。ミニ坐禅→本尊上供→諸堂案内を行った。

一、七月二十日（木）、福島県真言宗遍照寺一行十九名団参。本尊上供→諸堂案内を行った。

五十嵐(古田)鳴海さん一行参拝
4月17日

一、六月九日（金）田上小学校三年生、親子坐禅。児童二七名・保護者二六名・教員二名。

一、九月二一日（木）、「日報メディアシップで坐禅に親しむ」の会員九名（全員）、坐禅二炷。お斎無。

一、十一月二二日（水）、国際ホテル・ブライダル専門学校「葬祭ディレクター科」一行。十五名＋先生一名。

田上小学校親子坐禅　6月9日

日報メディアシップ　9月21日

国際ホテル・ブライダル専門学校
護摩堂山駐車場まで見送って
11月22日

【令和六年度事業、行持案内】

一、六月十五日（土）～十七日（月）、田上本山講では、「大本山總持寺太祖瑩山紹瑾禅師七〇〇回大遠忌参拝の旅」を行う。

一、七月四日（木）～六日（土）に、駒沢大学教授角田泰隆老師を講師にお招きし、第二十一回眼蔵会を講本「行持の巻（七回目）」で、行う。

今年は、五年ぶりに寺での宿泊と飯台を行う予定。

一、十月十三日（日）午後七時より、田上町仏教会では、東龍寺を会場に、講師に静岡県可睡斎・斎主・采川道昭老師をお招きし、第二十七回秋の講演会を予定している。

【月例加茂法話会】

一、毎月一回、夜、加茂市中央コミュニティーセンターを貸り、僧侶十一名（三名ずつ担当）による法話を聞く会を開催しています。お気軽にご参加下さい。

【月例坐禅会の御案内】

一、月例坐禅会を毎月第二土曜日夜七時半より行っています。

お気軽にご参加ください。

【梅花講のお知らせ】

一、梅花講では、毎月七日と、二十二日の二回練習をおこなっています。

お始めになりたい方は、お気軽にご参加ください。

【お盆、棚経の日程】

一、今年は、お盆の棚経回りを下記の日程で行いますので、ご理解とご協力の程、お願いします。

【お盆前】

新潟・亀田・三条・巻・燕・白根

【十三日住職】

新津・中山・赤渋・笠巻・三ツ屋・三枚潟・市ノ瀬・覚路津

【お盆中住職】

十四日　川之下・原ヶ崎・下吉田

十五日　鎌倉・新保・龍玄・嶋・庄瀬・石田新田・後藤・曽根・横場

十六日　下吉田・羽生田・川船河

【光明寺様】

十四日　本田上

十五日　山崎・山田・湯古屋

十六日　加茂地区

【少林寺様、若様】

十四日　湯川・谷・中店・上野

尚、当日多少の変更が出る場合もあるかもしれませんが、ご容赦ください。

編集後記

寺報三十六号を発刊するに当たり、山縣洋典老師・堀内正学老師・角松敏生氏・里村碧氏・木津文代氏より、ご寄稿を賜り有難うございました。今後も皆様のご寄稿をお待ちしております。

五年度は、新型コロナウイルスが五類となり、感染に配慮しながら、様々な行持が再開されだした。住職は、県外への布教活動に宮城県・群馬県・島根県へと行かせて頂きましたが、各地での有難い御縁に心から感謝しております。

一月一日に発生した、能登半島地震でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りすると共に、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧と安寧をご祈念いたします。

住職　合掌

小泉八雲の曽孫さんの小泉凡夫妻・洞光寺様と、島根県小泉八雲記念館にて
9月11日

曹洞宗心の電話

TEL　0120−508−740

携帯電話　03−3454−5410

こちらに電話をすると、全国の曹洞宗の方丈様達が一週間交代で、3分間の「ほとけの心」をわかりやすく説いた法話が流れます。24時間いつでも繋がりますので、是非、お聞きください。

永平寺電話説法

TEL　0776−63−3399

役寮が、10日ごとに代わって、3分～5分の法話を行っています。